Q２の答えは　シフゾウ

▲ 一度全滅した？シフゾウ

蹄は牛、角は鹿、頭は馬、体はロバに似るがそのどれでもないことから“四不像（シフゾウ）”の名がありますが、実際はシカの仲間です。中国北部～中部にかけての平原に分布していたと思われます。

①100頭は皇帝の狩猟場（北京）にいたもの。つまり、この時既に野生では絶滅していたことになります。大洪水や義和団の乱の影響で数が減り、1911年の２頭を最後に中国では絶滅したと考えられていました。

②一方19世紀末、イギリスのベドフォード公爵によって集められた十数頭の群れは繁殖に成功。その後の戦時下などの危機を乗り越え、1963年には400頭にまで増えたのです。1985年より中国では保護区に飼育個体を放す試みも行われています。海外では45園館で380頭（2000年）、国内では5園で14頭を飼育しています（2001年）。

当園では、2002年に１頭繁殖しましたが、その仔が病死したため、メス１頭の飼育が続いていました。今春やってくるオスに期待しています。

Q３の答えは　ネ　ネ

▲ 絶滅の淵から蘇ったハワイガン

『ネネ』…は現地の呼び方なのでその姿は想像できないでしょう。別名『ハワイガン』、その名のとおりハワイ諸島にしかいない水鳥の仲間です。

絶滅寸前になった理由は、①人による食用、②野生化した家畜による被害、と考えられています。また、彼等はあまり飛ぶことも泳ぐことも出来ません。なぜなら、溶岩がゴロゴロした高地で生活するため、立派な翼も大きな水掻きも必要ないのです。当然、敵が来ても逃げ切れず、隠れる草むらも見つけられず、捕まってしまうのです。こうして51年前には世界中でわずか“68羽”まで減少したのです。この内訳は、野生33羽、飼育35羽（ハワイ19羽、イギリス16羽）でした。

では、“68羽”からどうやって増えたのでしょうか？

結論からいうと、飼育の容易さ（とは言うものの、当時の関係者は手探り状態だったでしょうから、苦労はあったと思います）と保護活動のたまものなのです。

まず、飼育下で順調に繁殖し、1955年には野生の数を上回りました。過去に近親交配の弊害があったため、野生の個体を入れる工夫もありました。こうして1960年から飼育個体の野生復帰が開始できたのです（1960～1973年：1195羽放鳥）。

現在、日本国内でも16園で145羽を飼育しており（2001年）、そして今年から当園も10羽の飼育を始めます。

Q４の答えは　ダイアナモンキー

▲ またこんな姿を見たいダイアナモンキー

アフリカのシェラレオネ～ガーナ南西部に分布する樹上性のサルです。森林破壊の影響を受けやすく、狩猟の対象にもなるため20年以上前から激減しています。“ＣＩＴＥＳワシントン条約（絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約）”では、最も厳しく規制されています。海外では65施設188頭（1993年）、国内は9園で22頭（2002年）を飼育しています。当園は国内の調整を受け持っていますが、高齢のメスのみの飼育となっており、国内産の若い個体で新たなペア形成を目指しています。

このように、ヒトによって振り回されて辛く厳しい“冬”を過ごしてきた動物たちですが、今回ご紹介した動物たちには、同じヒトの手によってそれを乗り越え、“春の光”が少しずつ当たってきています。

未だ厳しい“冬”が続く他の仲間にも早く春が訪れるよう、私たちも努力していきたいと思っています。